

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば、人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、A 若い皆さんが世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。B、森を切り拓き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証しなのだが、見方を変えれば、<sup>②</sup>その自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、（孤独ではあるけれども）自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

C 現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で、ア フクザツだ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならぬ。世界の仕組みを理解して、イ キジツするには、数学がなければならぬ。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「<sup>③</sup>二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野のウ サイブンカも近年ますます進行している。例えば、脳の「海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深部で「新生ニューロン」という神経組織をエ セイセイしている。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競っているという。

たしかに、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、<sup>④</sup>何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かという点、現実はそうなっていない。実は新発見というもの、発見者が一五〜一六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。<sup>⑤</sup>このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、<sup>⑥</sup>「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで、オ カンキョウに適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

（小林康夫「学ぶことの根拠」）

問一 傍線部アㄱオのカタカナを漢字に直しなさい。ただし、楷書かいしょでいいねいに書くこと。

問二 

A	B	C
---	---	---

にあてはまる言葉として適切なものを、次のアㄱオの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ なぜなら エ とりわけ オ また

問三 傍線部①とあるが、なぜそう言えるのか。それを説明した次の文に合うように、適切な言葉を本文中からそれぞれ二十字前後で抜き出しなさい。

鳥や魚が「 X 」のに対して、人間は「 Y 」から。

問四 傍線部②とあるが、人間が「その自由に閉じこめられている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のアㄱエの中から選び、記号で答えなさい。

ア 世界を好きにつくり替えることができるために、常に世界に対し自由であり続けることが求められるということ。

イ 自分の存在の意味を確認するために、周囲の人間たちとの関係を常に意識しなければならぬということ。

ウ 与えられた世界だけでは満足できないために、絶えず世界を変え続ける必要に迫られているということ。

エ 世界が無限に広がっているために、未知なる世界を絶えず探求し続けていかなければならないということ。

問五 傍線部③とあるが、次のアㄱオは「第一段階」「第二段階」のどちらに属するか。「第一段階」ならばⅠ、「第二段階」ならばⅡと答えなさい。

ア 花の形を様々に観察して、花卉の仕組みを知る。

イ 地図の等高線をもとに、山の形を模型で再現する。

ウ そろばんを用いて複雑な計算問題を速やかに解く。

エ 虫の動きから春の訪れを判断して、種まきをする。

オ 目覚まし時計を分解して時計の構造を明らかにする。

問六 傍線部④とあるが、「なおさら」どうすべきだと筆者は言っているか。その説明をした次の文に合うように、十字前後で書きなさい。

新発見をするためには、なおさら「 」。。

問七 傍線部⑤とあるが、どういうことか。四十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥とあるが、「知らない」ということが重要であると言えるのはなぜか。七十字以内で説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学三年生になる息子の賢次が、過去に何回も補導されたという噂のある、小学六年生のヒロシと付き合っていることを知った母親は、彼が冬休みを前に突然口をきかなくなってしまったことをひどく心配し、小学六年生になる兄の光一に事情を探るように頼んでいた。本文はそれに続く場面である。なお、本文に出てくる老人は、三年前に妻を亡くした後、家の生け垣をブロック塀にしてしまい、近所との付き合いを避けるような生活を続けていた。

学校を終えてから真っ直ぐ学習塾へ行っていた光一が、夕食直前に帰宅した。そっと台所に入ってきて、食卓の前でテレビを観ている賢次を気遣いながら、母親に囁いた。

「やっぱヒロシさんと何か約束したらしいよ。賢次が口をきかないことを話したら、ヒロシくん、そうだろうなって笑ってた」

「何かを口止めされてるのね、きっと」

「そうらしい。……賢次のやつ、自分がお喋りしゃべりなのを知ってるから、一言でも口をきいたら危ないと思って、それで黙り込んでるんだよ」

「ばかねえ。……なんて子でしょ」

「仕方ないさ、男の約束なんだから」

「なによ。……それで光一も、約束の中身をヒロシくんから聞きださなかったってわけ？」

「あたりまえだろ、そんなことできないよ」

光一は、胸を張って厳然と言いつつ、息子の姿勢に、たじろぐものを覚えながらも、

「いいわ、賢次に直接聞いてみるから」

母親が言うと、光一は強いア口調で応じた。

「ムダだと思うけどね、ぼくは」

夕食後、母親が賢次を前にして問い質した。

「あんたが三日も黙り込んでるわけを、お母さんはちゃんと知ってるのよ。……いったいヒロシくんは何を口止めされたの？」

正座させられた賢次は、口を閉ざしたまま、イ上目づかいに母親を見つめていた。けっして言うまいと心に決めているのが、ありありだった。

「お父さんも、聞きたいっておっしゃってるのよ。……さあ、正直に言いなさい」

母親は、②賢次の意外にしぶとい抵抗に出合っ、夕刊を読んでる父親に応援を求めた。

「なあ賢次、……みんな心配してるんだぞ。お前が変な約束をしたんじゃないかって」

賢次は、まるい両膝にのせた手を握りしめていた。一文字にした唇が、少し歪んだ。

「あんた、夜中にトイレで喋ってたでしょ。それも、ちゃんと聞いているのよ、お母さんは」

賢次の顔にII狼狽の表情が浮かんだので、すかさず母親が追い討ちをかけた。

「おじいちゃんって、誰なのよ？ あんた、トイレのなかでそう言ってたじゃないの」

賢次の目に涙が湧きでた。急にすぼまった小さな唇が、かすかに震えはじめた。

「お母さん、いい加減にしなよ。……そんなに責め立てちゃ、賢次が可哀そうだよ」

光一が勉強部屋から出てきて、叫んだ。

「お喋りの賢次が約束を守るために、こんなに頑張ってるんだよ。……偉いじゃないか」

父親は鼻白んで夕刊に目を戻した。しかし、母親だけはなおも言いつのつた。

「あんな不良との約束を守って、なにが偉いのよ。……あんたは黙ってなさい」

「ヒロシくんは、不良じゃないよ。……前にはいろいろあったろうけど、今は違うんだ」

「なにが違うのよ。……勉強もしないで、下級生を引っ張りまわしてるじゃないの」

「そりゃ勉強はしないし、成績だって良くないけど。……下級生は、みんなヒロシくんが好きなんだよ。あいつ、優しくて面倒見がいいんだ。だから賢次もくっついて歩くのさ。……ちつとも遊んでやらないばくなんかより、賢次はヒロシくんのほうが好きだろうと思うよ」

光一の言葉に気圧されて、母親は黙った。賢次が濡れた目を輝かせて、兄を見つめていた。

「ねえ、お母さん、ちよつと来てみて」

学習塾へ出かけたばかりの光一が玄関で叫んだのは、冬休みに入った日の午後である。

「ほら、あの庭から煙が上がってるでしょ」

光一の指さす先は、例の老人の家であった。ブロック塀の向こうに煙が立ち上っている。

「なんだと思う？ ちよつと覗いてみて」

母親は急ぎ立てられるようにして、ブロック塀に近づき、そつと飾り穴から庭を覗いた。

「あら、賢次がいるわ。……ヒロシくんも」

③ 思いもかけない風景が、庭のなかに見えた。

落ち葉を山にした焚き火を囲んで、四、五人の子供たちがしゃがみ込んでいた。――肩を寄せ合って、火を眺めながらはしゃいでいる。ヒロシが、棒切れで木の葉を掻いて、火を起している。そばで、頬をふくらませて火を吹いているのは賢次だ。さらに驚いたことには、あの老人が子供たちのあいだに挟まって、楽しそうに微笑んでいたのである。

「どうしたことなのかしら、これは？」

「ねえ、びっくりしたでしょ？」

光一はおどけた顔を見せて、鞆をかついで忙しそうに駆けていった。母親が、また覗くと、焚き火を囲んだ子供たちがこつちを見ていた。

「おじいちゃんが、そんなところから覗いていないで、お入りなさいって」

近くで子供の声があった。門扉が大きく開いていて、そこでヒロシが笑いながら呼んでいた。

「今日は、みんなで焼き芋大会してるんだ。……もうすぐ焼けるよ」

縁側に腰かけて、ほかほかの焼き芋をほおばりながら、母親は老人の話聞いた。

「秋にヒロシ君が突然、交渉にあらわれましてね。……自分たちに柿の実を採る手伝いをさせてくれないかって」

老人は、収穫するのがIII億劫で放っていたので、ヒロシの申し出を快く承諾したのだそうだ。

翌日、ヒロシが子供たちを引き連れてきて、みんなで柿もぎ大会をした。長い竿を操あやつってヒロシが次々に実を落とすと、子供たちが大はしゃぎしながら、それを拾った。ヒロシは、採った実の半分を老人に、あとの半分を公平に子供たちへ分配してやっていたという。

焼き芋を掘り出しては子供たちに分け与えているヒロシを、老人は満足げに見守っていた。<sup>④</sup>

「そんなヒロシくんを見ていたら、世話好きで誰とでも楽しくお付き合いをしていたウ家内を思い出しましてね。……おかげで親しくしていただいていたご近所の方々と、すっかり疎遠になってしまっていることに気づかされました」

ブロック塀や門扉は、一人暮らしの不用心を思ってしまったことだそうだが、それが 自分の心まで閉じ込めてしまう結果になつたらしい。<sup>⑤</sup>

「ご近所の皆さんにも、この三年間いろいろとお気遣いいただいたようですね。……賢次くんも、お母さんに叱られるからって、ここにはいつも隠れるようにして来ていたんですよ」

賢次がヒロシくと並んで、焚き火の煙に目をしばたきながら、楽しそうに笑っていた。  
家では、ひさしく見せたことのない表情だった。

——あの子つたら、ヒロシくんに口止めされたんじゃないやなくて、自分から黙りこくつてたのね。一言でも喋って、わたしに知られたら、ここに来れなくなると思い込んでいたんだわ。

賢次の必死に閉ざした唇と、そんな弟をかばった光一のようなすを思い出していた。

焚き火を囲んでいる子供たちを眺めながら、母親が、そつと老人に言った。<sup>⑥</sup>

「……お正月に、うちでおエ雑煮大会をしましょう。ヒロシくんたちも呼びますから、いらしてくださいな」

「伺うかがいますとも、……楽しみにしてますよ」

老人は、嬉しそうに頷うなずいた。

(内海隆一郎『焚き火』)

問一 傍線部ア～エの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部Ⅰ～Ⅲの語句の意味として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- |             |            |       |        |
|-------------|------------|-------|--------|
| Ⅰ「たじろぐ」     | ア いらだつてしまう | Ⅱ「狼狽」 | ア おどろき |
| イ 納得のいかない   | イ とまどい     |       |        |
| ウ 気おくれしてしまう | ウ おびえ      |       |        |
| エ 大人じみた     | エ うろたえ     |       |        |

Ⅲ「億劫で」

- |           |
|-----------|
| ア めんどくさくて |
| イ かわいそうで  |
| ウ つらすぎて   |
| エ さびしくて   |

問三 傍線部①「あたりまえだろ、そんなことできないよ」とあるが、ここでの「光一」の説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- |   |
|---|
| ア 自分のことを信頼し打ち明けられた秘密を暴くといった、男らしくない振る舞いはしたくないと思っている。                       |
| イ ヒロシのことを信頼していて、彼と弟との関わりに首をつっこむような卑怯 <small>ひきょう</small> なことはしたくないと思っている。 |
| ウ 様々な問題を起こしてきたヒロシのことを警戒しており、これ以上は関わり合いになりたくないと思っている。                      |
| エ 目の前の受験のことで頭がいっぱいで、わずらわしい出来事に巻き込まれて時間をむだにしたくないと思っている。                    |

問四 傍線部②「賢次の意外にしぶとい抵抗」とあるが、「賢次」がこのような態度をとったのはなぜか、その理由の説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- |   |
|---|
| ア ヒロシと共に老人の家に遊びに行っていることを母親に知られたら、二度と行けなくなると思い込んでいたから。 |
| イ 妻に先立たれた老人の寂しさにつけ込み、柿や焼き芋をただで手に入れていることを後ろめたく感じていたから。 |
| ウ 日頃から世話になっているヒロシに、老人の家に遊びに行っていることは誰にも言うなと口止めされていたから。 |
| エ ヒロシを不良と決めつけ、自分達が何か悪いことをしているという前提で迫ってくる母親に反発を覚えたから。  |

問五 傍線部③「思いもかけない風景」とあるが、この「風景」のどのような点が「思いがけない」ものだったのか。六十  
字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「老人は満足げに見守っていた」とあるが、このときの老人の説明として最も適切なものを次のア～エの中  
から選び、記号で答えなさい。

ア 過去の自分を捨て去ろうと、懸命に頑張っているヒロシの態度に安心感を覚えるとともに、これからもこの家を開  
放するという形で彼の人的な成長に手を貸していこうと考えている。

イ 子どもたちだけでなく、年輩いた自分に対しても心配りを見せてくれるヒロシの態度を賞賛するとともに、そのよ  
うな関わり場所を提供できた自分自身の心の変化に満足感を覚えている。

ウ 自分のことにはかまわず、子どもたちのことだけを考えているヒロシの態度に感動を覚えるとともに、焼き芋とい  
う珍しい食べ物を食べさせることができたことをうれしく思っている。

エ みんなのことを気にかけて、優しく面倒を見ているヒロシの態度にいたく感心するとともに、子供たちの楽しそうな  
様子から、妻がいたころの昔にかえったような、幸せな気持ちになっている。

問七 傍線部⑤「自分の心まで閉じ込めてしまう結果になった」とあるが、このような「老人」の心境が、大きく変化した  
ことを象徴的に表している描写を、これ以前の本文中から十字程度で抜き出しなさい。

問八 傍線部⑥「焚き火を囲んでいる子供たちを眺めながら、母親が、そっと老人に言った。」とあるが、このときの「母  
親」について説明した次の文の空欄を、後の指示にしたがって補充しなさい。

老人との会話や子供たちの楽しそうな様子を通して、（ ）  
イ （ ）が間違っていたことに気づか  
されるとともに、家での息子達の様子を思い出し、自分が気づかないうちに（ ）  
ロ （ ）に驚かされる  
なかで、あらためて、ヒロシや老人に対して（ハ）の思いを感じている。

イ 自分で考えた十五字程度の表現

ロ 自分で考えた十五字程度の表現

ハ 下記のア～エの中から適語を選択

ア 嫉妬（しよと）  
イ 賞賛  
ウ 感謝  
エ 謝罪

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「勉強する」というのは、ひとことで言うと「生き延びる力を身に付ける」ことです。学校の成績を上げることではあ  
りません。「成績が良い」というのは「生き延びる力」の一つではありませんけれど、ごく一部にすぎません。「勉強ばかり  
しているせいで性格が悪い」とか「勉強ばかりしたせいで病気になる」ということになると、「成績は良い」ことが「生  
き延びる力」をむしろ弱めていることになります。

では、「生き延びる力」とはなんのことでしょう？

とりあえず、原始時代の人々の暮らしを想像してみてください。動物をつかまえたり、木の実を取って食べたりしていた  
ころの人たちのことです。そんな時代でも、やはり子どもたちを「教育」というしくみはあったはずですよ。今のよう  
な形のものではなかったにせよ、「学校」のようなものはあったはずですよ。

かりをする集団であれば、ある程度の年れいに達した子どもたちに「かりのしかた」を教える。どうやってえものを探す  
のか、どうやって矢を射るのか、どうやって危険を察知するのか、などなどを教える。魚をつることで食料を得ている集団  
なら魚のつり方を教える。木の実の採取をしている集団なら木の実の探し方を、畑を作って食べ物を作り出している集団な  
ら農耕のしかたを、それぞれ子どもたちは教えられたはずですよ。

でも、それだけじゃありません。どうやって仲間と協力し合って生きるか、どうやって結こん相手を見つけ出して自分の  
家族をつくり出すか、どうやって部族の伝統である食文化や宗教を次の世代に伝えるか、そういったこともまた、どれも「生  
き延びる」ために、どうしても学んでおかなければならないことでした。

仲間の中には **A** も **B** も **C** もいます。その人たちは健康で能力の高い人たちほどには働けない。その場合は、  
健康な人たちが「多めに働いて」かれらの足りない分を補う。当然のことです。自分だって昔は **A** だったし、いずれ **B**  
**B** になるし、ケガをしたり病気をして動けなくなることだって何度もあるはずだからです。働けない人は、「そうである

かもしれない自分自身」なのです。健康で働きのある人たちが、弱いものを支えるのは当然のこと。そういう考え方ができるのも「生き延びる力」の大切な一部です。

(中略)

原始時代に「かりの学校」に通っていた子どもたちはどんなふうだったでしょう。マンモスのかり方とか、オオカミと出会ったときの対処のしかたというような「教科」を教えているときに、居ねむりしている子どもとか、となりの子とおしゃべりしている子どもがいたら、「先生」はどうしたでしょう？ <sup>②</sup> たぶんずいぶん厳しくしかったと思います。「今ちゃんと聞いておかないと、いざというときに死ぬぞ」と言っただけです。おこった「先生」はその子どものことだけを考えていたわけじゃありません。一人や二人はそういうぼんやりした子どもが出てくることはしかたがない。でも、子どもたちの過半数が「かりの勉強」をちゃんとしなかったせいで、かれらが大人になったときにはもうだれもちゃんとかができなくなってしまうたらどうなるでしょう。そうになったら、たぶん、みんながうえ、いがみ合い、わずかなものをうばい合うようになるでしょう。弱いものから順番に死に始め、やがて集団は消えてしまうでしょう。20年後30年後のその様子がありありと想像できるからこそ、「先生」は「かりの授業」をさぼる子どもを「ちゃんと勉強しなさい！」としっかりつけたのです。

(内田樹『子どもはなぜ勉強しなくちゃいけないの?』)

問一 傍線部①「生き延びる力を身に付ける」とあるが、次のア～エの中から、ここで言う「生き延びる力を身に付ける」ことに当たらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が社会的弱者となった時のために富を蓄えておくこと。
- イ 伝統行事を通して文化や宗教を学び伝えていくこと。
- ウ 周囲の人間たちと協力して生活していくこと。
- エ 食料の手に入れ方や危険の避け方を学ぶこと。

問二 

A
---

C
---

 にあてはまる言葉としてふさわしいものを次のア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 成人
- イ 老人
- ウ 幼児
- エ 病人
- オ 若者

問三 傍線部②「たぶんずいぶん厳しくしかったと思います」とあるが、なぜ「厳しくしかった」のかを明らかにしたうえで、あなたの将来像と今後の学びのあり方について、百八十字から二百字で具体的に述べなさい。